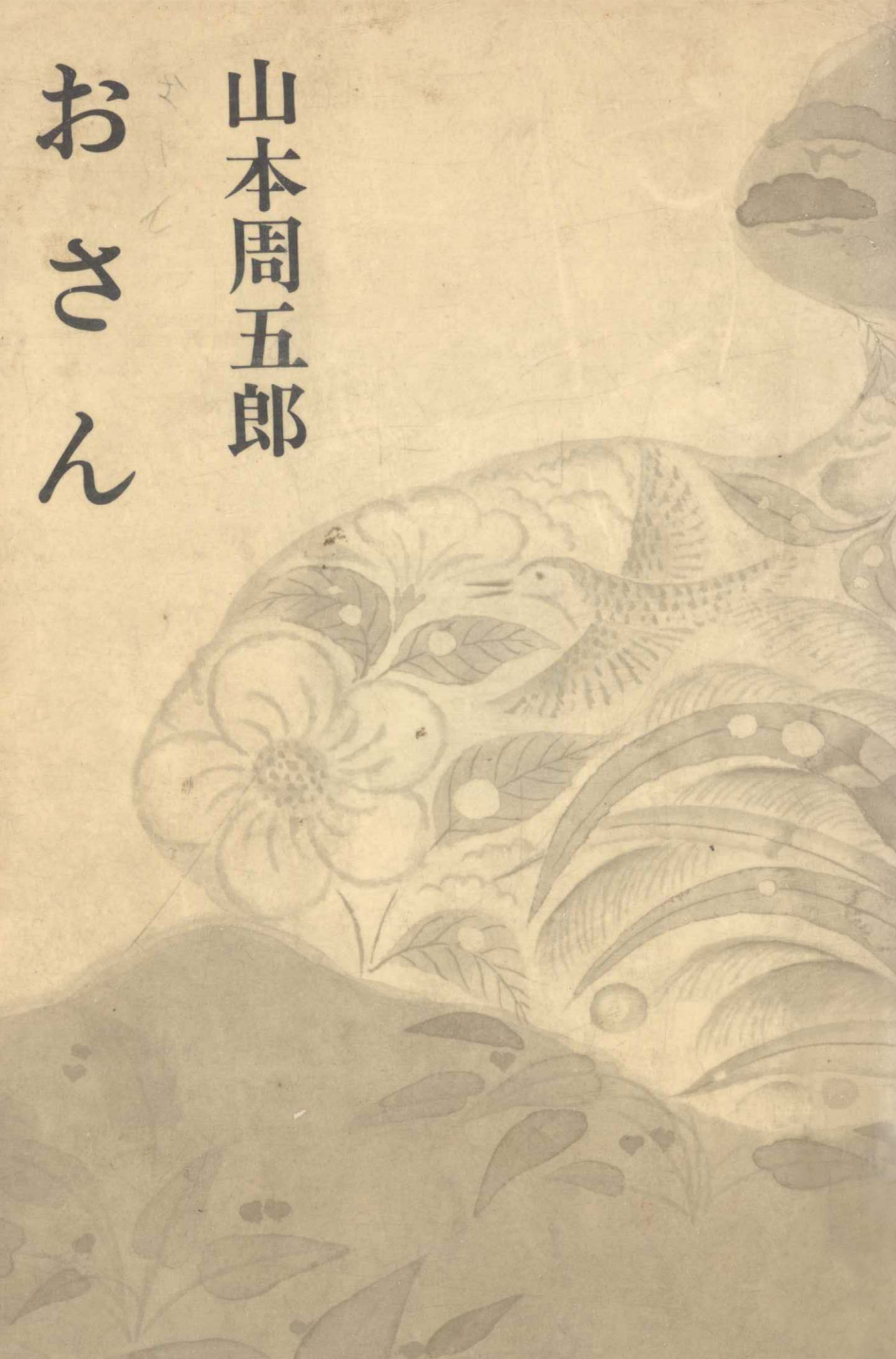
おさん

山本周五郎



おさん

山本周五郎

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1968

河盛好蔵
奥野健男　監修
土岐雄三

おさん（山本周五郎小説全集32）
昭和四十三年五月三十日発行
昭和四十四年十二月二十五日五刷

定価　四五〇円

著者　山本周五郎
著作権者　清水きん
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　神田・加藤製本所
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)二六〇一一一一
振替東京　八〇八番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

霜柱……七
あすなろう……三三
燕（つばくろ）……六七
おさん……一一一
榎物語……一六五
饒舌り過ぎる……二一七
十八条乙……二六一
改訂御定法……二八三
源蔵ヶ原……三三三

おさん

霜

柱

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

「繁野という老職を知っているか」
「繁野、――」石沢金之助は筆を止めて、次永喜兵衛を見あげた、「老職には二人いるが、どうかしたのか」
「としよりの家老のほうだ」
「御家老なら兵庫どのだろう、むろん知っているが、それがどうした」
「おれはつくづく」と云いかけて、喜兵衛は石沢の机へ手を振った、「もう片づくんじゃないのか」
「そう思っていたところだ」
「じゃあ下城してから話そう」と喜兵衛は云った、「中ノ口のところで待ってる」
そして足早にそこを去った。
老いぼれの、田舎者の、わからずやのへちゃむくれめ、次永喜兵衛は心の中でそう罵っていた。中ノ口を出て、木戸のところまでいっても罵り続け、石沢が来るまで、通りかかる下役の者たちが挨拶をしてゆくのに、ろくさま会釈も返さず悪口を並べていた。

「家でいっしょに夕食をしてゆかないか」石沢は来るとすぐに云った、「このごろあらわれないので家の者たちが心配しているぞ」
「一杯やりたいんだ」歩きだしながら喜兵衛は云った、「むしゃくしゃしてやりきれない、どうしても今日は一杯やりたいんだ」
「そんな気持で飲んだってうまくないだろう、とにかく家へゆくことにしたらどうだ」
「迷惑ならここで別れるよ」
「そろそろ癖が出るな」石沢は頭を振った、「そういう約束ではなかった筈だ」
「あんなくそじじいがいるとも云わなかったぜ」
「どこへゆくんだ」
「雪ノ井のほかにいい場所があったら教えてくれ」と喜兵衛が云った、「おちついて飲めるうちといえば雪ノ井がただ一軒、芸妓もいねえというんだからひでえ土地だ」そして吐きだすように付け加えた、「おれはまるでペテンにかかったような心持だぜ」
石沢金之助は黙って歩いていた。
大手門を出て堀端を右へゆき、蔵町から横井小路へぬけると馬場、その柵に沿った片側並木の道を左にまわり、明神の森につき当って、門前を右に二丁ほどゆくと大きな池のふちへ出る。雪ノ井という料理茶屋はその池畔にあるのだが、そこへゆくまでずっと、喜兵衛は休みなしに悪口を云い、女中に案内されて座敷へとおってからも、まだ舌の疲れはみせなかった。
その茶屋は池に東面し、左右とうしろに松林がある。二人のとおされたのは西の端にある座敷で、二方に縁側があり、庭へおりる段が付いている。そこから池まで約二十尺、向うに小さな桟橋が出ていて、小舟は二はい繋いであった。——池の対岸は黒ぐろと樹の繁った丘で、それは城

のある鶴ヶ岡と続いているのだが、その一部に鶴来八幡の社殿があり、そこは昔の砦趾だといわれていた。

「江戸屋敷に熊平という庭番のいたことを覚えているか」と喜兵衛が急に話を変えて訊いた、「右のこめかみのところに大きな瘤があったので、瘤平ともいわれたとしよりだ」

「上屋敷にか」

「梅林を受持っていた」

「覚えているようでもあるな」

「酒を早く」と喜兵衛は女中に云った、「肴はいつものとおり、魚田と塩焼と味噌椀、漬物をたっぷり頼む、へ、――」彼は右の肩をしゃくって唇を曲げた、「四万二千石の城下で、美味いのは漬物だけときている、いったいこの土地の人間には舌というものがあるのかい」

おかやという女中は笑いながら、喜兵衛に向って舌を出してみせた。

「ごめんなさい」とおかやは云った、「この土地ではこれを舌と云いますけれど、お江戸ではなんといいますかしら」

「じたというんだ」喜兵衛は膝を打った、「そんな物はしまって早く酒を持って来い」

おかやは殴るまねをして立っていった。

「悪い癖だ」と石沢が穏やかに云った、「こういうところへ来るとまるで魚が水へ帰ったようになる、まず酔わないうちに文句を聞こうじゃないか」

「熊平という庭番は疑い深いとしよりだった」と喜兵衛は云った、「この世にある物、この世で起こることをなに一つ信じない、たとえばいま雨が降っているとすると、その雨を信じない、現に自分の着物が濡れていても、それが雨の降っている証拠だとは云えない、と云うんだ」

「話したいのはそのことか」
「まあ聞けよ」と喜兵衛は云った、「彼は自分の住んでいる小屋を信じない、湯呑を信じない、池を信じないし池の中で泳いでいる鯉を信じない、もちろん自分を信じないし、地面も天も、太陽も月も信じない、すべてはただそうあるようにみえるだけだと云うんだ」
「つまらない話じゃないか」と石沢が云った、「としをとると変屈になる人間はどこにでもいるものだ」
「しかし熊平のはただの変屈じゃない、なにも信じないということは彼にとってりっぱな信念だったんだ、或るとき梅林の脇にひきがえるがいた、おれは熊平を呼んでそのひきがえるを見せたのさ、すると熊平はそれをひきがえるだと信じない、おれはそこで棒切れでもってひきがえるの尻を突っついてやった、ひきがえるはもちろんのそのそ歩きだし、おれは熊平にどうだと訊いた」
「おまえの口まねをするわけではないが」と石沢金之助が遮った、「そのひきがえると熊平をちょっと片づけてくれ、おまえがここへ来たのはおれに話すことがあるからだろう、その話というのを聞こうじゃないか」
「だからおれはいま、――」喜兵衛は上眼づかいに天床を見上げ、唇を舐めて、ひょいと片手を振った、「おい、よけえなことを云うから話のつなぎが切れてしまった、冗談じゃない、ええと」
「酒が来たよ」と石沢が云った、「一と口やったら思いだすだろう」
おかやが小女と膳をはこんで来、喜兵衛はすぐに盃を取った。小女は去り、おかやは給仕に坐った。盃で三つ飲むまで、喜兵衛は頭をひねりながら考えてる、石沢はおかやに話しかけた。この家の隠居は弓の稽古を始めて、石沢と知り合になったらしい。近ごろみえないがどうしたと石

沢が訊き、丈夫でぴんぴんしていますとおかやが答えた。ではもう弓はやめたのかな。そうでしょう、なにしろ飽きっぽい人ですから、と答えながらおかやは喜兵衛に酌をした。
「どうなさいましたの、なにをそんなに考えこんでいらっしゃるんですか」
「ひきがえるだ」と石沢が云った、「繁野老職とひきがえるを結びつけるために、苦労しているんだ」
「じゃあ肝心なことだけは云おう」喜兵衛はみれんがましい口ぶりで云った、「熊平の話から持ってゆきたかったんだが、――まあいい、問題はあの老人だ」
「繁野さんのことだろうな」
「むろんあのじじいだ」
「口を慎め」
「話が先だ」と喜兵衛が云った、「おれはこの土地へ来てもう九十余日になる、まだ九十余日しかならないともいえるが、この九十余日という日数を覚えておいてくれ」
おれは国許で廃家になった次永の家名を継ぐためにこっちへ来た、と彼は続けた。次永の家を再興し、中老和泉作左衛門の娘すみを娶る約束で、郡代支配という役についた。和泉家の娘ともたびたび会い、大いに気にいっている。温和しそうだし縹緻もいいし、妻にするにはもってこいの娘だと思う。住居も悪くない。繁野のじじいが自分の控え屋敷をあけてくれたのだそうだが、庭もかなり広いし家の間取も気がきいている。家僕の仁兵衛夫妻もいい人間で、女房の拵える食事も尋常だ。役所のほうもまず文句はない、下役はよく働いてくれるし、郡代たちにも反感を示したり、不服従なまねをするような者はいない。とにかく、いままでは、そういう者はいなかった。これを要するに、大体としておちつけるような条件がそろっているし、おれもおちつきたい

と思っていた。本当におちつきたいと思っていたんだ、と喜兵衛は念を押すように云った。
「ところがだめだ」と喜兵衛は首を振った、「今日までがまんして来たが、あの繁野のくそじじには手をあげた、おれは辞職して江戸へ帰るぞ」
「帰れやしないさ」と石沢が云った、「おまえはもう北島家の二男ではなく次永喜兵衛なんだ、まあ話してみろ、いったい繁野さんがどうしたというんだ」
「おれを眼のかたきのように小突きまわすんだ、老職部屋へ呼びつけてどなる、こっちの役所へ来てどなる、おまけに住居まで小言を云いに押しかけて来るんだ」
「繁野さんは温厚な人だぞ」
「郡代支配という役はむずかしい」と喜兵衛は酒を啜ってから云った、「それは説明するまでもないだろう、この土地に長くいて、土地の事情に通じていなければなかなか勤まらないものだ、ところがおれは江戸から来た人間だし、来てから九十余日にしかならない、二人の助役やその他の下役たちに助けられて、どうやら事務に馴れ始めたところだ」
繁野兵庫はもちろんそれを知ってる筈だ。しかもまったく容赦しない。役所に勤めだすとすぐから、どんな些細な誤りをもみのがさず、子供でも叱るようにびしびし小言を云う。助役の思い違いとか、下役たちの誤りまで、すべておれの責任にして叱りつけるのだ、と喜兵衛は云った。
「あんなひねくれた意地わるじじいは初めてだ」喜兵衛は唇を片方へぐっと曲げた、「あんなじじいを親に持った伜の面が見たいくらいだ」

二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com